

文化財教育 50 年

根 田 信 隆

かつて神奈川県の学校で日本史を担当していた私は、視点を決めて選択した地域の考古資料を教材化し、各単元の授業で活用しました。生徒は教科書に載っていない身近な遺跡に関心を示し、予想どおりの学習効果でした。その事例を教科研究会でしばしば発表してきました。

また赴任した学校で、考古学部や歴史部の顧問となり、学校周辺の遺跡踏査を生徒と続けました。1965 年からの発掘調査が行われる前の、海老名の相模国分寺跡へ出かけ、金堂跡の平板測量を生徒に教え、町役場前の小さな温故館で瓦の写真撮影や拓本をとり、文化祭で展示発表を指導したのも遠い昔となりました。

横浜市緑区の高校に転勤した 1973 年には、隣接する港北ニュータウン地域内の埋蔵文化財の発掘調査が本格的に始まっていました。私はこの年から毎年の夏休みに歴史部の生徒を引率し、発掘調査に参加させてもらい、秋の文化祭に調査団の協力で、パネル写真や土器・石器などを借用し、展示発表をさせました。私自身は、貴重な遺跡が調査終了と同時に、ブルドーザーでの削平を惜しみ、多くの遺跡をスライドに撮りました。学校の要望で、PTAの父母にスライドの上映を行って、学校周辺の遺跡の概要を知ってもらったことも思い出となります。

授業で考古資料を教材として与える時も、文化財の保護の大切さを指導してきました。1981 年の秋から県教委は文化財保護週間のフェスティバルの一環として、高校生に文化財の理解と

郷土への愛着心を育てる「講演と映画の会」を 8 校ずつ選抜し実施しました。私の勤務校でも 1985・87 年の 2 度、小宮恒雄さんと坂本彰さんに講師を依頼し、スライドとビデオと出土遺物も展示して易しく話してもらいました。生徒は反応もよく、所期の目的を果たしたと思います。

港北ニュータウン地域内の発掘調査がたけなわの頃、緑区（現青葉区・都筑区も含む）の有志が結成した「緑区郷土史研究会」の会員から考古学を学びたいとの要望がありました。そこで坂本彰さんらと、1977 年 12 月に「考古部会」を発足させました。活動方針は緑区内の遺跡の分布調査を中心に、調査中の遺跡の見学や勉強会などです。翌年の 1 月から毎月の例会がもたれ、5 年間で区内の全域を実地踏査し、多くの遺跡を発見しました。小中学生から主婦も参加し、そのつど考古学の手ほどきをしました。毎月の活動は会報『あしあと』にまとめられ、10 年間で 74 号に達しました。そうして蓄積した区内の考古資料は、『横浜市文化財地図』作成へ提供され、のちに複数の部会員も執筆した 3 巻からなる『横浜・緑区史』に結実したのです。

定年となった私は、教員時代の流れを引きずって、地元の相模原市の公民館を中心に、歴史探訪の講師を依頼されて、毎回テーマを決め、県内と近県の史跡と文化財を案内して、歴史を学ぶ楽しさを味わってもらっております。

急な原稿の依頼を受け、結局は年寄りの独り善がりの駄文となったことご寛容下さい。

2010年11月3日 見学会

「勝坂遺跡縄文まつり」と周辺探訪

田中 節夫

11月3日(水)勝坂遺跡見学会の日の午前「勝坂遺跡縄文まつり」があり、下溝駅から歩いて三段の滝と、相模川左岸用水の磯部の堰を見学し勝坂遺跡に向かいました。

相模川が長い年月をかけて削った谷には豊かな森林と青い水の流れ、遠くに丹沢の山並みが眺められ自然が一杯です。

河岸段丘上の勝坂遺跡で縄文人が生活していた頃の自然の豊かさはどうだったのかな……

川に沿って進むと磯部の堰があり、相模川左岸用水として私の住む茅ヶ崎の田んぼにもこんなに遠いところから水を引いていたのだと知りビックリしました。

川岸から坂を上り案内板のあるところを左に曲がると勝坂遺跡公園で、公園に入ると広い広場を後ろにして2棟の竪穴住居が復元されていました。土葺き屋根、笹葺き屋根があり、一般的に見る屋根とは全く異なった材質に驚かされましたが、国内に事例のある形態を参考にし復元したことを知りました。

祭りのため人が多く、幾つかの場所で子供たちがワイワイ言いながら手作りを楽しんでいました。火起こし、石器・アクセサリ作り、布編み、弓矢で狩り、石皿の上でクルミ割り、土器焼きなど盛りだくさんのイベントがあり、自然の中で縄文時代の生活を体験したことでこれからもこれら文化財に親しんでくれることでし



相模川と大山方面



よう。また縄文探検隊のクイズがあり、あちこちに点在する現場を探しながら説明板を確認する親子の



アクセサリ作り

姿が見られ、私もクイズに挑戦して「特製ドングリせんべい」を食べることができました。

敷石住居址では相模原市で文化財のボランティア活動されている方が丁寧に説明をしてくれました。この西側の照葉樹林を下り有鹿神社奥宮とホトケドジョウがいるという湧水を見ながら古墳時代の祭祀場所に想いを巡らせました。

昼休み、広場の端で昼食を取り、午後の遺跡見学会までの空いた時間に、近くの勝源寺（曹洞宗）へ出かけ本堂に上がって「六本庚申」とも呼ばれ養蚕に効験があるとされた青面金剛像を拝観させていただき、この土地のお話を伺うことができました。

続いて隣の石楯尾神社前の自治会館で大勢の人が新春恒例の凧揚げ大会用の凧の骨組みになる竹の加工に精を出していました。

式内社と同じ名前の石楯尾神社の本殿は鬱蒼とした森林の中で長い階段を上り詰めたところに静かに建っていました。



有鹿神社奥宮と湧水

午後の見学会では管理棟に陳列された土器、遺跡内の遺構や復元住居について詳しい説明があり、笹葺き屋根は現在も京都で活躍している笹葺き職人が復元したことなどを含めて、見学会ならではの新たな発見が幾つもありました。

旧中村邸などを含めて下溝駅から一周する相模原市の「縄文への誘い 勝坂遺跡群まるごと探訪」コースは遺跡のある土地を知りながら楽しく歩けますので、多くの方にも是非歩いていただきたいですね。

2010 年 12 月 5 日 見学会

秦野二子塚古墳 出土遺物見学会に参加して

稲 村 繁

早朝から電車を乗り継ぐこと約 2 時間、神奈川県南東端に位置し東京湾を望む横須賀から、県北西部丹沢の山懷に抱かれた秦野の渋沢駅に到着しました。

当日気温約 16℃と、薄手の上着でも日向を歩くと軽く汗ばむほど暖かな陽気ではありましたが、西方を望むと、山裾近くまで雪に覆われた霊峰富士が眼前に迫り、あらためて師走を迎えていることに気づかされました。

今回の見学会は、桜土手古墳展示館開館 20 周年記念特別展「発掘された秦野の古墳」の開催期間最終日にあわせ、最新の出土品でもある銀装大刀を中心とした二子塚古墳出土資料を見学することでした。

10 時に集合した後、二子塚古墳の調査を担当されている秦野市教育委員会の霜出氏の先導で駅から歩くこと約 20 分、水無川の畔にある桜土手古墳展示館に到着しました。入館すると最初に、講座室で氏から展示館の沿革と秦野の古墳についての概要をうかがいました。

館の沿革については、桜土手古墳群の保存と資料の展示を目的としてバブル期のおわりに開館し、今年で 20 周年を迎えるとのことでした。また、今回の展示は 20 周年に合わせ企画されていましたが、二子塚古墳からの銀装大刀出土というタイムリーな資料の出現によって展示内容を一部変更したそうです。

秦野の古墳に関する解説では、古墳と集落の分布と、北西から南東方向への緩斜面で形成される秦野盆地の地形との関係が大変興味深いものでした。北西部の山裾で伏流水となった地下水が盆地の南東部で湧水することから、集落は盆地の出入り口でもある南東部に集中しているのに対し、古墳は集落が確認されていない中央部や北部山裾にも分布しているとのことで、集落と古墳との関係を考えるうえで示唆的

な話をうかがうことができました。

二子塚古墳についての概説後、今回の主目的である出土遺物の見学をおこないました。部分的な発掘調査でありながら銀装大刀・金銅製馬具・鉄鏃・耳環・須恵器群の出土は、伊勢原市登尾山古墳・ラチメン古墳に匹敵するような副葬品の豊富さをうかがわせます。見学時には装飾大刀や県内の横穴式石室墳などについて若干の解説をさせていただきましたが、あらためて丹沢山地南麓を東西に結ぶ内陸のルート、すなわち伊勢原から秦野盆地を通り山北～御殿場～三島に至る現在の国道 246 号線と概ね一致する御殿場ルートの存在を強く感じました。

展示の見学後参加者のほとんどは二子塚古墳の現地見学へと向かったようですが、私は仕事の関係もあり職場に戻ることにになりました。しかし、折角ここまで来たのにという思いもあったことから、トンネルひとつなく秦野盆地から酒匂川河畔へと至る 246 号線に沿って走る小田急小田原線に乗って新松田駅までゆき、松田駅で乗り換え御殿場線で千代廃寺を遠くに眺めながら帰路につきました。

最後に、県内で古墳に興味をもたれている方々が少ないのか、あるいはすでに資料を実見されているためなのか、役員の方々を含めても参加者の総数は 10 人余と寂しい限りでした。とりわけ、これからの考古学をリードしてゆくべき若い研究者の参加がみられなかったことが残念でした。



セピア考古学雑記

このコーナーは、神奈川県の考古学の土台を築いた方々の足跡をインタビュー形式で振り返ります。今回は横浜市在住の伊東秀吉先生にお話を伺いました。

――考古学との最初の出会い？

小学校の頃は、わりあい歴史は好きでした。織田信長や豊臣秀吉の伝記などを読むことが多かった。読むと時代背景が知りたくなる。そこで兄や姉の本を借りて読むとか、そういうことが好きだったですね。当時の教育は記紀関係の神話で、縄文や弥生なんていうことは当時の教科書にはありませんでした。でも土器なんか拾うと、「これ、本当に神様が作ったものかな。空から降ってきたわけじゃあるまいし。」そんな疑問はもっていました。授業を聞きながらも「なんか変だな」「もっと知りたいな」という気持ちがありました。

考古学に興味をもったのは、中学に入ってからです。私が通った旧制第二横浜中学の周りには三ツ沢貝塚で、一面に貝塚が広がっていた。それで休み時間や放課後には石鏃や土器などを拾いにいくんです。土器片なんかたくさん落ちていて、それがなんだか調べたい。だから歴史の先生に、どんな本を読んだらいいのか訊いて調べるといのが興味をもつようになったきっかけですね。また、二中では大場磐雄先生や石野瑛先生が教員だったんです。私の入学前ですが。そんな関係で学校にも土器がたくさんあったし、文化祭があるとそういう人を呼んで講演してもらったりというので、興味が湧いたんですね。

当時の中学の先生が考古学に通じており、大場先生のこともおられた。大場先生が保土ヶ谷で瀬戸ヶ谷古墳を調査したことがありましたが、その時、その先生に連れて行ってもらって調査を手伝ったことがあった。それが私の初めての発掘調査でした。当時の調査ですから、トレンチをあけて主体部を探して、分かったら内部を調査するだけのものでした。私は日曜日

に参加しただけで、調査の初めから終わりまではいなかったのですが。

その後は、大学に入るまで発掘調査には参加していません。大学生も全員が参加できる時代ではなかったですから、中学生や高校生の手を借りるというのはほとんどなかった。瀬戸ヶ谷貝塚の時は運が良かったんですね。

――大学時代には考古学、発掘を？

私が大学で考古学をやるときには家族は大反対しました。食べていけるのかって。登呂の発掘がその頃始まっていましたが、当時はテレビがなかったので、新聞やラジオだと一般の人にはピンとこないんです。だから当時は考古学を知らない人が多かった。でもいろんな状況があって、私は考古学の道に進むことになった。大学は、中学の頃から大場磐雄先生を知っていましたから、國學院に行きました。

私が大学に入った頃は発掘自体が少なかった。役所も苦しい時代で、福祉などにもお金を使わなければいけない時代でしたから。考古学の先生は大学から出るわずかな費用で調査を行っていました。だから、女子は連れて行ってもらえなかったですね。学生の賃金はもちろんなかったし、むしろ持ち出しのほうが多かった。発掘で賃金がもらえたのは、30歳の頃です。やっとタバコ2箱分でしたが、それをもらったときは、ああ、発掘でお金がもらえたという感慨がありました。

大学の調査は、まず先生が遺跡に行って、農家の人と交渉するんです。それで学生の休み期間中で、かつ農家が作物を作っていないときをみはからって調査をする。調査期間は1週間から10日です。トレンチを1本か2本掘って、遺構にあたるとそれを広げる。住居址なら1軒掘って帰ってくる。そんな調査がほとんどでした。

ちょうどその頃、和島誠一先生が横浜市から横浜市史関係での調査を頼まれていたんですが、その当時和島先生は資源研（資源科学研究所）の研究員で、手元に学生がいない。そこで大場先生のところに来られて、ぜひ学生を貸してく

れないかと。そこで大場先生に勧められて、私は学生を連れて南堀貝塚の調査に行ったんです。南堀貝塚の調査は、今までの大学での調査とは規模が違いました。台地を全部掘ったんですから。土層の堆積状況など、こんな調査もあるんだということで興味を持ちました。調査後の整理作業では甘粕健さんや岡本勇さんなんかも親しくなりました。そのあとは市ヶ尾の横穴や三殿台にも参加しました。その頃からだんだん開発に伴う規模の大きな調査を大学で引き受けてやるようになってきましたが、私は大学での調査よりも和島先生との関係が深かったですね。

——その頃ご自分で興味を持たれていたことはありますか？

私は卒業論文は外国の考古学だったんです。方法論を勉強したいなと思って。まだ日本の調査は規模が小さく、いいモノを見つける、または住居址を一軒掘るといった、そういうのが多かった。なんかそういうのは、外国の文献を見ているとちょっと違うような気がしたんですね。本当は外国に行ってみたいと思っていたんですが、そのうちに開発がどんどん進んできて、忙しくなった。

——大学を出られて、そのあとは？

5年間、大学院に行きました。もちろん調査もしていましたが、自分で月謝を払うために高校の講師などもしていました。関東学院や久我山高校、川崎の橘高校などです。橘高校からは卒業後に声がかかり、その後ずっと勤めることになります。

——川崎では教員としてどのように考古学と関わっていたんですか？

あの頃は、川崎の遺跡に関することが何もわかっていなかったんです。調査例が非常に少なかったし、分布調査が全然されていませんでしたから。でも川崎は工場やマンション建設、その労働者の宿舍などがどんどん建って、どんどん遺跡が壊れていく時代だったんです。そこでまず私は、農家の方で考古学に興味をお持ちだった持田春吉さんらと市の調査体制整備を陳情

したんです。その結果、2～3年して村田文夫さんが川崎市教育委員会に入りました。そして古文書や民俗資料も含めて調査員を集め、どこに何があるのか調べようということになりました。そこで私は古墳の分布を調べることになり、日曜とか夏休み、冬休みになると川崎じゅうを歩きまわりました。その後は古墳以外にも10人くらいで分布調査を行い、2冊分布図を作ったんです。でも、当時市が分布調査を積極的にやらなかったのには理由があったんですね。分布図を配ろうとしたら議会からクレームがついた。発表されちゃうと土地の価値が下がってしまうと。それで結局配布はできませんでした。私も一部だけしかいただけませんでした。

川崎にははじめ、村田さんと僕しかいなかった。開発が多かったので、村田さんは事務仕事で忙しい。現場に出て調査をやっている時間がなかったんですね。すると私に話がくるんですが私は本来の教師という仕事があるからなかなか大変でした。

川崎市役所の調査の報告は私たちが市に要望し、『文化財収録』というのを年1冊出して、調査の概要を載せました。役所の仕事の場合はいいんです。ところが一般企業だと「報告書はいらない。そこを掘ってもらって建物が建てられればいいんだ」という、そういう時代が数年続きました。当時は、調査費は出してくれるんですが、整理費用はほとんどない。小さな調査なら整理費が自腹でもよくても、規模が大きな調査はそうもいかない。だからその当時、報告書がでない遺跡が全国的にいくつもあったんです。間に挟まれた私たちは、うんと困りました。我々のころの発掘は今とはかなり違ったんですね。民間の調査会社もない時代でした。調査費だけ、整理は自分たちだけでなどといったら赤字でつぶれてしまいますから。個人にかかっていたんですね。

——教員になられてからは毎週土日に調査にでるような毎日だったんですか？

夏・春・冬休み、土日はなかったです。たまに家にいると家内が「あんた具合でも悪いの？」

なんて(笑)。帰りも遅かったですね。私には市から教育長名で調査の依頼がくるので、3時半までは学校にいて、飛び出すと同じ川崎市内での現場ですので、なんとか行って指示ができる。日中は持田さんや、就職浪人している考古学の学生を調査主任として調査してもらって、私は授業が終わったら行くと。本当に大変でした。

——今まで調査した遺跡で、一番印象に残っているものは？

海老名の本郷遺跡ですね。20数年、断続的にやっていました。やっぱり一番長くつきあった遺跡ということです。この遺跡では調査団を5人の委員会制度にしていたのですが、最後は私が主にやっていましたね。法政大学の曾根さんや大坪さんが参加してくださいました。

——最後に、神奈川県の考古学に対するご意見や思い、展望があれば一言お願いします。

県考古学会員というのは幅が広いんです。研究者もいれば一般の人もいる。それを会としてどう運営していくかというのが昔からの課題だったし、今も一番大きな課題じゃないかと思います。研究や論文集などで神奈川県の考古学の発展に寄与することも大事ですが、同時にできるだけ広い人に考古学に関心をもってもらう。それが文化財の保護ということにおいても大事だと思います。

伊東秀吉(いとうひできち)

昭和5年横浜で誕生。旧制横浜第二中学校を卒業後、國學院大學に進学。同大学大学院を経て川崎市立橘高等学校に教員として定年まで勤務。遺跡分布調査や、職務の合間を縫っての川崎市内の遺跡発掘調査を行い、川崎市の考古学の礎をつくった。

(インタビュー：平成23年1月23日、伊東先生のご自宅にて担当役員の中川・野口がお話をうかがった。)

＊文中に出てきた主な遺跡と人名

●瀬戸ヶ谷(せとがや)古墳

現在の横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷町にあった前方後円墳。築造は6世紀とされ、多くの埴輪が出土した。

●南堀(みなんぼり)貝塚

現在の横浜市都筑区南山田にあった縄文時代早期・前期の遺跡。中央に広場をもつ縄文時代前期の集落の姿が日本ではじめて明らかになった。

●本郷(ほんごう)遺跡

現在の海老名市本郷にあった、旧石器時代から中世にわたる複合遺跡。特に奈良・平安時代の大規模な集落遺跡として知られる。出土遺物も豊富かつ多様。

●大場磐雄(おおばいわお)

國學院大學に考古学専攻を設置し、基盤をつくった。「神道考古学」の提唱者として知られる。各時代・幅広い分野にわたる遺跡の調査研究を進め、文献史学・民俗学なども積極的に採り入れた。

●持田春吉(もちだはるきち)

日本考古学協会員。農家ながら発掘調査に参加して考古学への見識を深めて研究を重ね、昭和54年に自費で川崎考古学研究所を設立。

●和島誠一(わじませいいち)

縄文時代集落論を代表する研究者。研究テーマは多岐にわたる。



あの遺跡は今…

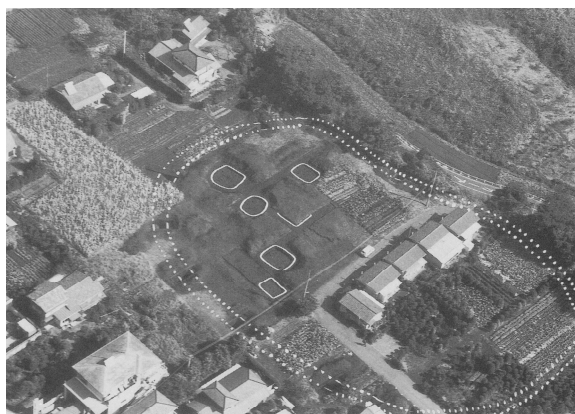
神崎遺跡

—弥生時代後期のヒトとモノの移動—

鯉渕 義紀

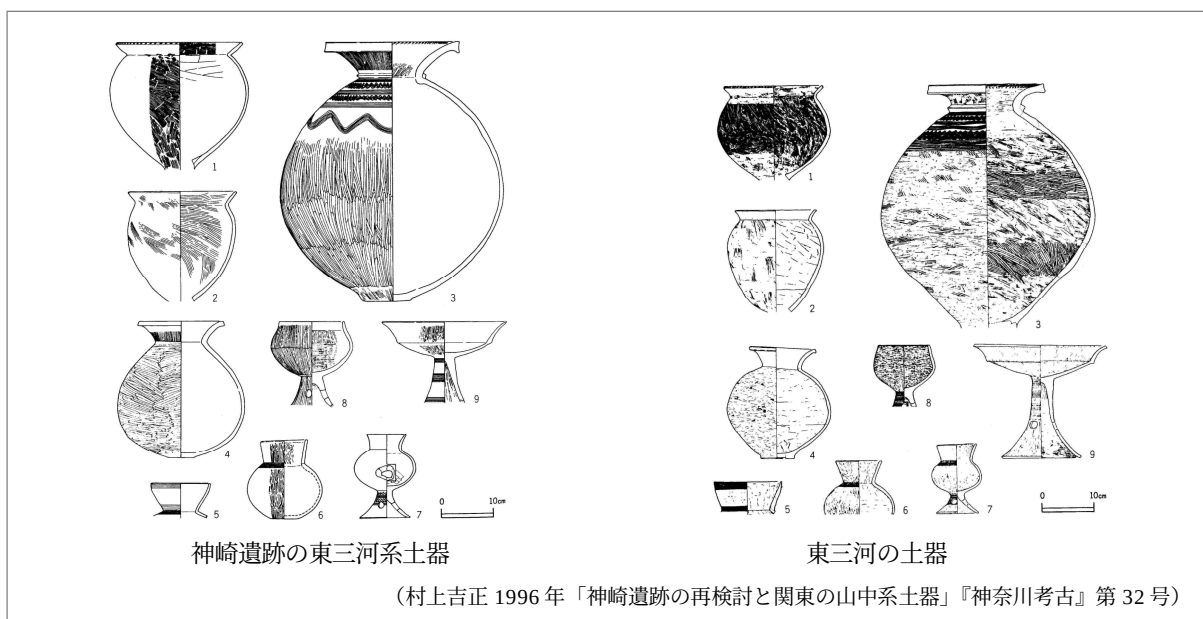
神奈川県綾瀬市神崎遺跡は、弥生時代後期の環濠集落が発見された遺跡ですが、特にこの遺跡から出土する弥生土器は東海地方の土器が全体の95パーセント以上を占め、東海地方から直接的に集団移住してきた人々のムラであると考えられています。神崎遺跡は遺跡の1割あまりを発掘しているにすぎませんが、南北103m、東西65mの平面楕円形の環濠内に弥生時代後期の竪穴住居址が6軒発見されています。住居址はいずれも重複しないで単独で発見されていて、この集落が短期間のうちに廃絶したことを物語ります。このような外来系の土器が多数占める集落が相模川とその支流である小出川、目久尻川などの流域には数多く存在していることが、近年の発掘調査からわかってきました。

目久尻川の流域では高座郡寒川町倉見才戸遺跡、倉見大村遺跡、小出川流域では高田遺跡、大蔵東原遺跡など多くの遺跡で弥生時代後期の環濠集落が発見されています。これらの遺跡はいずれも東海地方西部の東三河、西遠江地方、今の静岡県西部から愛知県東部にまたがる地域



ですが、この地方の土器にそっくりな土器が多く出土しています。そして、どの遺跡でも集落の規模が小さく、比較的短期間のうちに遺跡が廃絶していることと倉見才戸遺跡のように弥生時代中期後半の時期では大規模な地域の中心となる環濠集落であるにもかかわらず、後期の遺跡との連続性がないことなどから何らかの理由によって東海地方の人々が直接に移住してきた遺跡として考えられます。このような状況は相模川の西岸の厚木市内の遺跡でも見られ、厚木市御屋敷添遺跡では東三河産と考えられる土器が多数出土する環濠集落が発見されています。このように相模川の流域には弥生時代後期のある時期に東海地方からのヒトとモノの移動が顕著に認められるのです。

この遺跡は今、将来にわたり守り伝えていくため、国指定史跡として保存されています。



(村上吉正 1996 年「神崎遺跡の再検討と関東の山中系土器」『神奈川考古』第 32 号)

考古学講座「神奈川の考古学・最近の動向」開催のご案内！！

神奈川県考古学会設立 20 周年を記念して、今回の考古学講座では、当考古学会の発足当初であり、開発事業等に伴う発掘調査事例の増加が著しい約 20 年前から、成果の活用方法を模索し始めた 10 年前、そして最近の動向について各時代の成果について発表していただきます。多くの会員諸氏のご参加をお待ちしております。

- ◆日時 平成 23 年 3 月 6 日（日） 午前 9 時 35 分～16 時 45 分（開会は 9 時 40 分～）
◆場所 横浜市歴史博物館 講堂

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1. 旧石器時代の動向（諏訪間順） | 5. 奈良・平安時代の動向（服部みはる） |
| 2. 縄文時代の動向（石井 寛） | 6. 中世の動向（玉林美男） |
| 3. 弥生時代の動向（西川修一） | 7. 近世の動向（山口 剛） |
| 4. 古墳時代の動向（柏木善治） | 8. 近現代の動向（天野賢一） |

2011 年度 総会のご案内

2011 年度の総会を下記のとおり開催する予定です、ご案内します。

- 日程 平成 23 年 5 月 14 日（土）
○場所 神奈川県埋蔵文化財センター
3 階 研修室

○総会後に「考古トピックス 2010」開催！
なお、開催時間や議事等詳細が決まりましたら、正式にご案内いたします。

～ 編集後記 ～

当学会も 20 年が経過し、これまでの回顧と展望として、記念講演などの催しが行われました。今号の連絡誌でも、20 年間会員として学会を支えてこられた一人でもある根田先生に、巻頭言を賜りました。

また、今号から新たに連載企画を盛り込みました。県の考古学史をインタビュー形式で載せた「セピア考古学雑記」、かつて発掘調査された遺跡の現在を辿る「あの遺跡は今…」の 2 コマです。次号では、「御宝再発見」と「大地の一頁」を掲載する予定ですので、乞うご期待！

新規役員の募集！

今年度末をもって、役員 7 名が任期満了となります。これに伴い、2011 年度総会において、役員の改選を行います。神奈川県考古学会の運営に携わってみたい、自分でいろいろと企画して、事業を実施してみたい、小さいことからでも協力したいという会員の皆さま、この期に役員になってみてはいかがでしょうか？自薦、他薦は問いませんので、やる気のある方は右記メールアドレスにご連絡ください！

考古かながわ 第 45 号

発行 神奈川県考古学会
発行日 2011 年 2 月 14 日
編集 中川真人・野口浩史（連絡誌担当）
印刷 (有)湘南グッド
発行者 神奈川県考古学会 会長 岡本孝之
〒252-8520 藤沢市遠藤 5322
慶應大学 岡本孝之研究室 気付
郵便振替 00240-9-71208
e-mail soumu@koukokanagawa.net
U R L <http://www.koukokanagawa.net>